センス・オブ・ワンダー

（レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳、新潮社）

キーマンの書棚

神秘に驚く感性 育む

赤城育心こども園長
深町　穣さん(55)
前橋市柏倉町

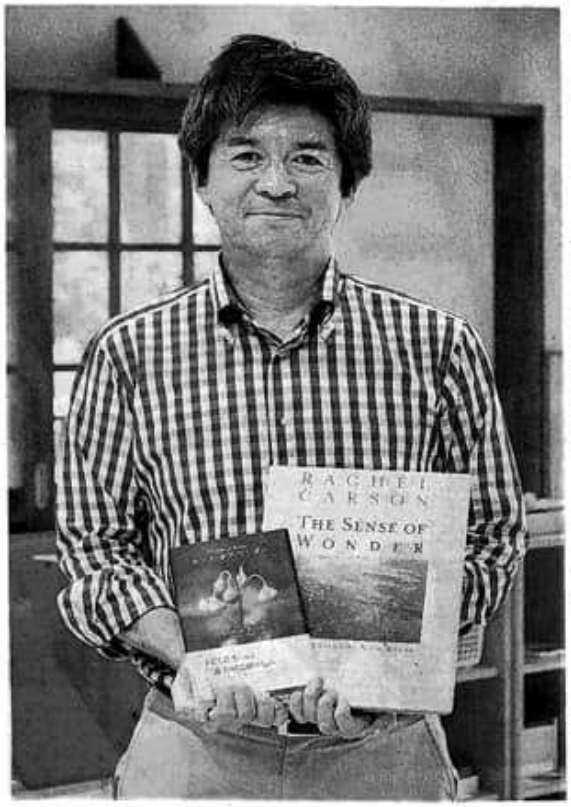
農薬などに含まれる化学物質による環境汚染について警告した「沈黙の春」で知られる著者。本書では米北東部メーン州にある彼女の別荘を訪れたおいと自然の中で過ごすさまを写実的、叙情的に描く。自然の美しさを発見し、驚嘆する「感性」を育む大切さを説いた。

大学を卒業し、会社勤務を経て、青少年育成を担う財団法人で働き始めた20代の頃に出合った。タイトルの響きが良く、気になっていたところ、偶然立ち寄った前橋市の煥乎堂で売っているのを見つけ迷わず購入。運命を感じた一冊だった。

お気に入りは、著者が〈世界中の子どもに生涯消えることのないセンス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見張る感性）を授けたい〉と語る一節だ。本書の言う感性が、保育の世界の非認知能力という言葉と重なる。子どもは自分から興味を持ったものだからこそ、さらに文字を覚えたい、図鑑を読みたいと思えるようになるのだろう。

父が酪農家だったこともあり、幼少期は赤城の自然に触れて育った。その経験が園長となった今に生きている。園では、自宅のキャンプ場で一緒に山を歩いたり、雨の日に傘を差さずにかっぱで本物の雨を感じさせたりしている。読み書きそろばんを詰め込むのではなく、子どもたちがやりたいと思ったことを大切にする。

発見や感動を共有できる大人が子どものそばにいることが大切だと説く本書。保育士や保護者にも読むよう勧めている。「自分がどんな立場にいるのか把握する感性がなければ人は育てられない。大人も感性を磨き、いろいろなことにチャレンジする姿を示して、子どもに感じ取ってほしい」と思いを込めた。



「以前、バージニア大で原書も買った。美しい写真も見てほしい」と話す深町さん